

カムリ A 群のオスの個体間関係

菅 原 和 孝*

1. はじめに

私はニホンザル自然群におけるオスザルの、他のオスザル、メス、コドモに対する関係を解明する目的で、1973年の8月から9月にかけて、および11月から12月にかけての約2カ月、カムリA群の個体識別をおこないながら、個体間の交渉を記載した。4歳以下のコドモの識別はまだ完成しておらず、資料として甚だ不十分ではあるが、ここにカムリA群において見られたオトナオスの各々の個体間関係のあらましをまとめて、今後の調査の方向を明らかにしておきたい。

カムリA群の個体識別の経緯および群れの構成は佐藤俊(1972)の報告に詳しいので、それを参照して頂きたい。なお佐藤は1973年の秋に17頭のアカンボウを確認し、1973年12月現在のオトナオスを除くカムリA群の総数を84頭と決定している。

2. 非交尾期におけるオスザル

(1972年8月9日から9月6日まで)

この期間に見られたオスは表1の通りだが、このうち M. J. B. K は撮影できず識別も不十分なので佐藤(1972)の識別名と対応させることができなかった。

個体間関係を考えるうえで、私は親和的關係としてグルーミング(以後 gr と略す)、伴食、寄り添ったり連れ立って歩く行動などに注目し、反撥的關係として、攻撃、威嚇、逃走、相手の接近を避けて立ち去る、等の行動に着目した。しかしこれらの行動だけを取り出して単純に親和性あるいは反撥性の指標として用いることは誤りであり、具体的な記述の積み重ねの中から個体間関係の様相を了解するべきだと私は考えている。ここでは紙数の関係上、具体的な記述の多くは割愛せざるをえず、各オスザルの他個体に対する関係の素描を与えるにとどまっていることをお断りしておく。

(1) アクタロウ、ジロウ、サイゾウ、カクゾウ この4頭は夏の餌場においては群れと共に現われ、メス達の群らがりの中で採食して許容されることが多かった。それゆえメスやコドモとの関係についても他のオスとは異なる点が多いので、一括して扱う。

リーダーのアクタロウが関与した群れの他個体との直接的な交渉の例数はあまり豊富ではない。それは彼が餌場で優占的にコムギ、ダイズ、リンゴ、トウモロコシなどの餌を採食でき、採食を終えると茂みの中などで長い休息をとるせいかもしれない。他個体を攻撃した事例は5例しか観察されていないが、そのうち3例まではメスやコドモ、あるいは他のオスザル達の間争いに介入するかたちで行なわれた。(従来このような攻撃はコントロール・アタックと呼ばれているが私はここではそれを介入的攻撃と呼ぶことにする。)メス達はアクタロウに依存して他のオス達を攻撃するが実際に彼がメスに加担して他のオスを攻撃した例は見られなかった。アクタロウが餌場のすぐ外で休んでいる時に、ジロウが餌場の中心でメス達と争うのを私は2度観察しているが、いずれの場合もアクタロウが威嚇姿勢をとってゆっくり接近するとジロウは攻撃を中断して平静な表情で餌場を出た。なおアクタロウの gr. 関係はコドモから一方的に gr. をされた例を2例見ただけである。

*京都大学理学部

表1 非交尾期に出現したオスザル
(1973年8月10日—9月5日)*

順位	個 体 名	推 定 令 年	出 現 日 数
1	アクタロウ	14~15	17
2	ジロウ	9~10	17
3	サイゾウ	8~9	17
4	カクゾウ	7	17
5	ゴロウ	8~9	12+α
6	サンスケ	8~9	7
7	シロ	7~8	12+α
8	シチロウ	6~7	7~8
	アカブツ	10~11	2
	シロヒゲ	11~12	2
	M.	6~7	1
	J.	7~8	1
	B.	6~7	2
	K.	5	3~4
	アカ?	6~7	2**
群れが餌場に出た日数			17
延べ観察日数			23

*ただし8月20日~23日は観察を中断した。
**アカ?は群れが餌場に出ていない日に単独で出現した。

表2 カムリA群のメス

略号	推定年齢	個 体 名		
OAd.	15歳以上	タ マ シ カ イ ト コ ゴ ミ コ タ ブ ナ ブ ナ		
		Ad.	11~15	コ ブ シ カ エ デ ユ リ ス ギ スマ ツ デ マ ヤ ト チ ハ ユン Yf ₁ キ ク ブ ド ウ モ ミ ジ ヤ ム グ ミ
		SAd.	6~10	カ ノ ヤ ク ギ ク ク ノ ロ ヒ ノ キ ア ザ ミ Pf ₁ Pf ₃ Pf ₄
Y	4~5	Pf ₂ Pf ₅		

アクタロウが付近にいないときオスとメスとの間では多くの争いが見られたが、その様相はそれぞれのオスによって異なっている。ジロウとメスとの争いをもっとも頻繁であり激烈な「向かい合い」のかたちをとるのが普通であった。これに反してサイゾウにおいては「向かい合い」は殆んど見られず、彼は餌場で採食中にメスから攻撃されると威嚇表情をとりながら餌場を出ることが多く、逆に彼が攻撃をしかけてもメス達が立ち向かうことはなかった。この2者ともコドモへの攻撃は一度しか観察されていないが、カクゾウはコドモを示威的な態度で実に頻繁に攻撃した。一方、カクゾウはコドモとの gr. 関係も頻繁であり、またブドウ (Ad.*メス)、ヒノキ、Pf₁、Pf₄ (いずれも SAd. メス) から gr. を受け、特にブドウとは伴食関係が見られた。これに対してジロウは一度も gr. 関係が観察

されず、サイズウもキク（高順位の Ad. メス）に gr. されるのが1度見られた程度である。（*略号については表2を参照のこと）

これらのオスの間で見られた攻撃は2例にすぎない。ひとつは群れが餌場に出た直後、メス達に攻撃されていたサイズウがアクタロウの出現と同時にカクゾウを攻撃し、アクタロウも一緒にカクゾウを追った例であり、もうひとつはコドモを攻撃していたカクゾウをサイズウが追った例である。マウンティングはサイズウからカクゾウに1度だけ観察された。

なおジロウとサイズウの間には伴食関係が見られたが、これら4頭のオスの間では gr. 関係が見られなかった。

(2) その他のオス達 (1)で述べた4頭以外のオス達(表1)は夏の餌場においては、おおむね、群れが餌場を去り始めるころに初めて出現し、大忙ぎで餌を食って去ってゆく個体である。それゆえ直接、彼等との交渉が見られた群れの個体は、すでに多くのメス達が餌場を去って休んだり山へ登り始めたりしているときにまだ餌場に残留しているカクゾウや低順位のメス達そしてコドモ達に限られてくる。またこの項で述べるオス達のうち、シロヒゲとアカブツは観察期間中2度しか姿を現わしておらず他のオスと同列に論じるのは不適當かもしれない。

カクゾウとこれらのオス達との交渉には興味深い点が多々ある。彼はこれらのオス達が現われるとしばしば音声を伴わない木すゆりを行ったり、彼等に尾を上げて歩み寄ったりした。（この接近のあとにはマウンティングの行なわれることがあった。）また、この期間中初めてシロヒゲが現われた時にはその直前の10数分間カクゾウは示威的に尾を上げて餌場を徘徊しコドモやメスを次々と攻撃した。シロヒゲが餌場近くの休み場に侵入するとカクゾウは音声を伴わない木すゆりをおこないシロヒゲはリズムック・リップ・ムーヴメントで、これに反応した。このようにカクゾウはこれらのオス達の接近に際しては極めて緊張し示威的になるようである。

これらのオス達は餌場で採食中にメス達に攻撃されることが多く、攻撃されれば素早く逃走した。特に、日中から餌場に接近することの多かったシロはよく攻撃された。また逆にゴロウやシロが不意にメスを激しく攻撃してそのまま逃げ去るのも稀れに見られた。

カクゾウとメス達が餌場を去っても幾頭かのコドモ達が餌場に残っていることがあり、オス達はそのようなコドモ達が接近すると威嚇や攻撃を行なうことがあった。

また一方、シロはコドモとしばしば gr. をしあつた。オトナメスとの gr. 関係は、シロヒゲが、初めて現われた直後、Pf₄の前に横たわり彼女がナキツラをうかべて、gr. をした例しか見ていない。

これらのオスの間での攻撃の例数は(1)で取り扱ったオス達のそれより多い。それは、数段に分かれている餌場のある段で採食している上位個体が、同一の段に侵入してくる下位個体を追い出すというかたちで起こることが多かった。

介入的攻撃としては、コドモを攻撃しているアカブツをゴロウが攻撃するという例があった。またカクゾウの接近によりアカブツがゴロウを攻撃したり、あるいはサンスケに威嚇されたシチロウがアカブツを攻撃し更にアカブツが B. を攻撃するなどの代償攻撃の例が見られた。

いっぽうゴロウ、サンスケ、シロのお互いの中で、またシロとシチロウの間で、平静にすわりこんで共に同じダイズのかたまりから取って食うという伴食の関係がみられた。またシチロウとアカブツが連れ立って行動するのが観察された。

3. 交尾期におけるオスザル

(1973年11月8日から12月5日まで)

佐藤は交尾期のカムリ A 群の内部およびその周辺に18頭のオスザルを確認している。しかしそのうち7頭は群れのひろがりからかなり離れて行動することが多く、もっぱら群れ内部で観察していた私には識別することができなかった。私が識別し得たオスは夏に餌場に現われたもののうちM, J, B, Kを除く10頭と新たに識別したハチロウとの計11頭である。

(1) 交尾 観察された交尾はアクタロウ=モミジ (Ad. メス), アクタロウ=カエデ (Ad. メス), サイゾウ=キクの間で行われた3例と、群れがいないときに夏の餌場に単独で現れた Pf₂ (Y. メス) と不明のオスとの間で行われた1例とを数えるのみである。また Pf₂ はその交尾の数日後、群れとともに餌場に出て来たときにも尻に精液が付着しているのが見られた。なおカクゾウは1度 Pf₂ にマウントしようとして彼女に避けられた。

サイゾウは8月にもキクに長い gr. を受けていたから、彼等の間には交尾期に限らず何らかの親和的な絆があるのかもしれない。

(2) アクタロウ, ジロウ, サイゾウ, カクゾウ これら4頭と他のオス達を区別する実際上の根拠は非交尾期のように明確なものではないが非交尾期との対照の便のため、非交尾期と同様ゴロウ以下のオスと分けて記述する。

アクタロウはモミジとコンソート関係にあるときは彼女から頻繁な gr. を受けていた。また彼のほうからキク, ハン (Ad. メス) などに近づいて前に横たわったり、メスの肩をひっぱったりして gr. の催促をするのが見られた。更に、アクタロウとジロウとは、私が餌を与えるものと誤認して集まってきたあと、20分にわたる相互 gr. を行った。夏も含めた全観察期間を通じてアクタロウ, 4頭のオスの間で見られた gr. 関係はこの1例だけである。

夏と異なり、これらのオス達とメスとの反撥的關係は、餌を投げ与える際の激しい奪い合いを除けば、殆んど見られなかったのは印象的である。特に夏に大仰な攻撃が頻繁に見られたカクゾウはこの期間殆んどそのような行動をとらなかった。

gr. 関係については、キクがジロウを、サイゾウがキクを、ひとかたまりになって同時に gr. しているのが見られた。またジロウとサイゾウはコドモとの gr. 関係をもっていた。これに対してカクゾウはコドモとの gr. 関係は見られなかったが、夏に親密な関係をもっていたブドウ, Pf₁ の他にシカ (OAd. メス) との相互的 gr. が見られた。このシカとの gr. はヒノキと若いメスとを含む4頭の集まりの中でなされていた。

次にこれらのオス同士の関係についてであるが、ジロウのサイゾウへのマウンティングが1度見られた。またその翌日、アクタロウの近くにすわっていたジロウのもとへサイゾウがまっすぐ歩み寄り隣りに腰をおろすと、ジロウがすぐにその場を立ち去るのが観察された。(前述のキク・ジロウ・サイゾウの集まりはこの数分後に見られた。) このような下位の個体が上位個体に接近し上位個体がそれを避けるという現象は夏にジロウとカクゾウの間でも見られており、興味深い現象である。

そのほか、反撥的關係に類するものはこの4頭のオスの間では私は観察していない。

(3) その他のオス達 交尾期において、特にゴロウはメス達の群らなりに接近して許容されており、前項の4頭とゴロウ以下のオス達との区別が不分明なものであることを示している。また夏には2回しか観察されなかったシロヒゲがほとんど毎日、メス達とは一定の距離を保ちながらも群れと行動を共にしているのが見られた。

メス達とこれらのオス達との関係で注目したいのは、ゴロウとノギクの間で頻繁に相互的な gr. 関係が見られたことである。しかし彼等の間に交尾は1度も見られていないから、この2者間にはコンソート関係とは異なる何らかの親和的な絆が存在するのかもしれない。

これらのオスザル達のメスやコドモとの反撥的關係の例はごく乏しいが、餌のカボチャをめぐってゴロウとブドウおよび2～3歳のコドモとの間に長い争いが1度観察された。またゴロウについてメス達の集まりによく接近していたシロは、夏と同様、メス達が近づいたり彼に向かって鳴いたりするとすみやかに逃走した。その他のオス達はメス達と接近することを避けているようであり直接的交渉は見られていないが、今度の交尾期に初めて出現したと思われるオス（佐藤に拠る）を群れの多くの個体が激しく吠えながら追い回すのが一度見られた。

コドモとの gr. 関係は特にシロヒゲにおいて頻繁に見られた。またシロヒゲは3～4歳のメスから gr. されたあと彼女にマウントして腰をスラストさせるのが1度観察された。

これらのオスの間では、サンスケ、シロ、シチロウの各々の間に gr. 関係が見られたほか、ゴロウがサンスケ、シチロウのそれぞれと一緒にすわったりともに採食するのが見られた。シロヒゲがオトナスと直接に交渉を結ぶ例はついに見られなかった。

この期間には反撥的關係はこれらのオスの間ではまったく観察されなかった。これはひとつには個体間の許容性が交尾期には高まっているためということが考えられる。しかし何よりも大きな要因は、夏には集中的に餌がまかれる餌場で大忙ぎで採食しているときの彼等の間に関係しか観察できなかったことに求められよう。見通しのきく冬の餌場での観察から推測するならば、ゴロウ、サンスケ、シロ、シチロウ達の間は平和的でしかも互いに頻繁なコンタクトをとりあって生活しているように思える。

4. お わ り に

資料の集積の不十分な現段階においてはこのような観察事実の列挙しか行ないえないのが現状である。今後はコドモ達の識別を完成させて、特に3、4歳のオスのコドモの個体間関係に焦点を合わせ、オスの周辺化の過程をあきらかにしてゆきたいと思っている。

謝 辞

本調査を行なうにあたり草部所長をはじめとする自然保護センターのスタッフの方から多大の援助を受けた。特に水野昭憲、糸田敬仁、外一次、中川助二、安本辰雄の各氏のお世話になるところが大きかった。また水原繁二、西山勝治の両氏にも大変お世話になった。最後に1972年からカムリA群の調査を継続している先輩、佐藤俊氏に多くの助言を受けた。ここに心から謝意を表しておきたい。